

## 日向国延岡藩内藤充真院の好奇心

——『色々見聞したる事を笑ひに書』を素材として——(1)

神 崎 直 美

## はじめに

本稿は、日向国延岡藩主内藤政順まさゆき夫人であった内藤充真院を検討する試みの一端として、その内面——特に好奇心——を分析するものである。内面は、個人により千差万別であるが、江戸時代の大名家に生をうけた女性として、どのような事象・物に心引かれたのか、考えたのか、対応したのかということ、明らかにしてみたい。

本来、先人の内面というものは、なかなかわかりにくいものである。検討の素材としては、私的な書簡や記録・雑記・蔵書類などがあげられる。書簡や記録類は、その内容や文章表現から、書き手の内面を窺い知ることができる。蔵書は、分野の傾向から所蔵者の知的な趣向がわかる。これらは膨大に現存する公的な書類・記録類と比較すると、今日まで継承されたものは数量としては少ない。まし

てや、近世において女性が書き記した物、および女性が所持していた書物と確定できる蔵書群の現存は極めて少ないのが現実である。

しかしながら、幸いにも充真院は筆まめな人物であった。文才に加え、画才にも恵まれ、魅力的な筆致の軽やかな挿絵を配した紀行文を作成したことで、近年、近世史および女性史研究上で知られる人物である。その文章は情緒豊かであり、自らの思いを素直、かつ濃やかにしたためているところが特徴である。その手による著作は、豊かな教養と伸びやかな感性に裏打ちされており、人間像を髣髴とさせる類稀な著作を生み出したといえよう。

充真院の写本や著作は、現在、明治大学博物館に七七点確認できる。そのなかの一本である『色々見聞したる事を笑ひに書』は、老年期の充真院が興味・関心を持った事柄を書き留めた書物である。本書を素材として、充真院が好奇心を持った事柄を明らかにしてみたい。それにより、充真院の人物像に関する新たな発見を見出した

いと思う。

## 1 『色々見聞したる事を笑ひに書』について

まず、『色々見聞したる事を笑ひに書』について、簡単に説明しておこう。当本は、現在、明治大学博物館に内藤家文書の追加分として所蔵されている。<sup>①</sup>体裁は五四丁からなる冊子で、縦二五、二横・横一六、五種である。現在は、後世に補修した濃紺の表紙で装丁されている。

本書を作成した時期については、本書そのものに明記していない。具体的な年こそ不明であるが、「かしかと云蛙の事」と「蛇よけの御守」の箇所<sup>②</sup>に、「東京」という表記があるので、江戸を東京に改称した慶應四年（一八六八）七月以後にまとめたものであることは間違いない。したがって、本書は、充真院が慶應四年（一八六八）七月以降、すなわち六十九歳以降に草した著作である。作成年を絞り込む手がかりはないが、慶應四年七月から、充真院が明治十三年（一八八〇）十月に八十一歳で亡くなるまでの十二年の間に作成されたのである。いずれにしても、晩年のつれづれを慰める日々の中で誕生したものといえよう。<sup>③</sup>

まず、題名に注目したい。その題名からも明らかのように、充真院が見聞した事柄をまとめたものである。「笑ひに書」とは、「笑い

にしよう」という意味から命名したもので、一種の言葉遊びである。そのネーミングから、充真院のちゃめっけが感じられる。本書には、充真院の人生における様々な見聞のなかでも、笑えるようなもの、楽しめる事項を意図してまとめたのである。これが、本書を作成する際の方針であり、同時に、充真院が本書をまとめる際の心持でもあり、楽しみながら筆を運んだ様子が察せられる。

収載した内容の大部分は、充真院が近世後期と明治前期に、江戸と延岡および、東京で見聞した事柄である。最も古い時期の見聞は、充真院が子供の頃、すなわち彦根藩井伊家（譜代・三〇万石）の姫君として充姫<sup>みつひめ</sup>と称していた文化年間前半頃まで遡る。具体的には、「鷹かさ」の治療法の記述に、「私子供の時出来、御か、様色々の薬付候より」とあるように、自らが罹患した折に母親が施してくれた治療法が記録してある。<sup>④</sup>充真院は、寛政十二年（一八〇〇）生まれなので、罹患と治療の記憶がある子供時分とは、文化年間（筆者注：ちなみに、充真院は文化元年（一八〇四）当時、五歳である）の前半のことである。さらに、子供の頃の見聞としては、「鈴虫かいらする事」、すなわち鈴虫の飼育法についての箇所<sup>⑤</sup>で、「私は人のかうを子供の時見し計」とある。

充姫は、文化十二年（一八一五）に十六歳で内藤家に嫁ぎ、その後、没するまでの六十五年間の長きに亘り、内藤家の一員として過ごした。見聞の舞台は、井伊家の江戸屋敷をはじめとするが、大部分は内藤家の六本木屋敷と延岡の本丸外の屋敷である。その晩年に

至るまでの間にかけて、人生の様々な時期における見聞を濃やかに書き留めたのである。

本書に収載した見聞は、他者から聞いたことと、実際に充真院が体験したことからなる。体験した事実について一例をあげると、「かしかと云かわすの事」の箇所、河鹿が「宇津のやとうけ」に多く棲息している様子を、「私とをりし時ハ、谷河の流ニてよくなきしを聞」というに、実際に自らが体験した旨を明記している<sup>6</sup>。

さらに、体験であっても、その解決方法・処置を他者から聞いた場合には、その出所を明記している。例えば、「水のんとなつかへぬましない」、すなわち冷や水を飲む時に胸につかえる事を解決する方法について、「私ひや水のミシ度々むねにひたとつかひこまりし所、ある人夫には一口のむとき、かむまねをしてのんといれハ、つかゆる事なしとおしへられし所」というように、人名を具体的に記してはいないものの、他者から教えてもらった知識であることを明らかにしているのである<sup>7</sup>。

一方、知識として知っているものの、実際に体験していない場合も、その旨を明らかにしている。例えば、前述した鈴虫の飼育法では、「私は人のかうを子供の時見し計、よくハかひ立やう知らず」「人の世話致手伝ゆへ極よくハ知らず」と、子供の頃の見聞という古い記憶であり、詳しい飼育法は知らないことや、少し手伝ったに過ぎず実際に自らが飼育したのではないというのをあえて記載している<sup>8</sup>。このように実体験か、それとも伝聞なのかということを書

き分けている様子は、本書をまとめるにあたり充真院がとった姿勢として注目すべきであろう。

この著作を草するにあたり、充真院は読者を想定していたようである。それは、鴛鴦の飼育法をまとめた「おし鳥子を取法」や、山舞蝶（山繭蛾のこと）の飼育法である「山舞かい立る事」の記述から窺える。鴛鴦の飼育法の文末には、「少シ計書置しゆへ、又よく知る人ニたづねべし」（傍点筆者）とあり、この事項については自分が知っているわずかな知識のみをしたためたにすぎないので、詳細については飼育法をよく知っている人に尋ねるべきであると記している<sup>9</sup>。さらに、山繭蛾についても文末で、「私ハ委敷世話も致不申候ま、書留る程ニハ申されず、（中略）此くらいと申事をしらす也」（傍点筆者）とあるように、第三者に伝える意識、つまり読み手を想定しながら執筆していることがわかる<sup>10</sup>。もっとも充真院が意識していた読者とは、自分の身近にいる人々のことであろう。

ところで、本書は一つの著作として完成したものではない。実は作成途中の段階のまま一冊に装丁された、いわば未完本なのである。それは、原本の記載状況や余白の様子を見ると明らかである。おおまかには、前半が清書で目次と本文からなり、後半には本文の草稿が綴じ込まれている<sup>11</sup>。目次は四三項目が掲げられているが、一方、収載されている本文は一一九項目もある。清書した目次にしても順が乱れていたりと、目次に掲げられていない本文もある。清書の部分も、本来ならばさらに調整の必要があったはずである。

もつとも、充真院自らが、清書と草稿を共に一冊にまとめたのか、それとも充真院没後に遺族もしくは御付の者が充真院の遺品であるお手元本を整理した際に、完成部分と草稿を、とりあえず一冊にまとめたのかというように、複数の可能性が考えられるが、この点についてはさだかな確証は得られない。

清書と草稿が混在していることから、書物の体裁としては完成度を欠くとみなされてもいたしかたないかもしれない。しかしながら、その一方で、清書と草稿を比較すると推敲の様子が窺える点、および、草稿にはまとめたものの、清書には収載されていない多彩な内容についても、充真院が関心を向けた分野をより広く知ることができる点は貴重である。草稿の部分にしても、第二部として目次を作成して本文を整える予定があった可能性も否定できない。そのような視点で眺めれば、本書はさらに興味深いものである。不徹底に思える収載状況とはいえ、充真院が興味・関心を持って書き留めた事項であることには変わりない。むしろ草稿の混入は、著作に豊かな魅力を添えることになったといえる。

本文の内容は、身体に関する治療法やまじない、飼育法、迷信、怪異などに大別できる。治療法とまじないの記述は、混沌としており、それぞれに分類できない部分もあるが、当時の認識としては、ごく自然なことであろう。これらについての記述は、簡潔な短文が主であり、項目数としてはもつとも多い。飼育法がそれに続いて多く見られるが、記載としては一項目に多くの分量を費やしていると

ころが、身体に関する治療やまじないの記述と比較すると対象的である。怪異や迷信は数としてはわずかであるが、近世後期および明治時代前期を生きた人物の意識を窺い知る格好の素材である。全体の傾向としては、生活の知恵をまとめた著作といえよう。治療については、現在のいわゆる民間療法と共通する事柄がある点は興味深い。生き物の飼育法についても、現在の飼育法に応用できるものもあれば、大名家ならではの飼育もある。これらの内容について、飼育法、治療法とまじない、迷信と怪異の順で見よう。

ここで特に最初に扱う飼育法の対象となった生き物についてふれておきたい。充真院が本書に書きとめた生き物は、鴛鴦・金鳩・鶏・山繭蛾・金魚・河鹿・鈴虫・猫・蚕・ぜに亀・松虫・草雲雀・丹頂などである。なかでも金魚や鈴虫、猫などは、当時の人々にとって、さらには現在の私たちにとっても、育てる楽しみ・鑑賞する楽しみ・慈しむ楽しみを味わうペットとして身近な存在である生き物たちである。一方、鴛鴦や丹頂の飼育は、広い屋敷地を所有する大名家だからこそその飼育であり、とりわけ優美な姿と大きな個体である丹頂はその典型といえよう。これらの記載は充真院本人が実際に飼育した生き物と、実際に飼ったことはないが飼育法やそれに関して知識として知っている物との両方がある。実際に飼育した経験があるものは、鴛鴦・金鳩・山繭蛾・金魚・河鹿・猫・蚕・丹頂である。

充真院は人生のなかで、様々な生き物を育てることを楽しんだが、

とりわけ詳しく飼育法を書き留めたのは、鴛鴦・山繭蛾・蚕・金魚である。本稿では鳥類・昆虫・その他の順でみてゆこう。

(1) 『色々見聞したる事を笑ひに書』は、藩政史料として名高い一連の「内藤家文書」とは別に、平成五年に当時の内藤家当主の内藤政道氏より寄贈をうけた書籍群九〇点・一七六冊の中の一冊である。本書が掲載された目録は、『内藤家文書増補・追加目録(5)内藤政道氏寄贈書』(明治大学刑事事博物館編集、平成六年)である。架号は、同書の一二頁に、(2)充真院(繁子)関係(1)の史料番号十七として記載されている。目録には本書について、「雑記」と注記がある。なお、本書は、宮崎県延岡市の市民グループ「充真院を学ぶ会」の会員諸氏により全文が翻刻され、平成十七年に明治大学博物館から『内藤家文書増補・追加目録9 延岡藩主夫人 内藤充真院繁子著作集1』として刊行され、より身近に親しむことができるようになった(以下、翻刻本と略して表す)。刊行の際に、充真院の著作の特徴である挿絵を再現してあるので、原本の雰囲気を知ることができ、かつ楽しく読み進められる。以下、本稿で本書の記載部分を示す折には、翻刻本の頁を示すこととする。翻刻本には読点を施してあるが、本稿に引用する際に、より読みやすくするために、読点を追加して示すこととする。なお、翻刻本は翻刻の段階で濁点を施してあるが、原文にはごく例外的にしか濁点は施していないので、本稿では引用の折に原文に忠実に表記する。

(2) 「かしかと云蛙の事」は、翻刻本の七〇頁、「蛇よけの御守」は七七頁である。

(3) 晩年に文筆活動に勤しんだ江戸時代後期の女性として近年著名になった人物としては、旗本家の夫人である井関隆子がいる。井関隆子は天明五年(一七八五)生まれで、天保十年(一八三九)の五十四歳の頃「さくら雄が物かたり」を草し、天保十二年(一八四一)の五十六歳

から没年の同十五年(一八四四)にかけて、深い教養と持ち前の好奇心・批判精神を背景に、当時の世相・幕政についての記述がある克明な日記を残した人物である(井関隆子については、深沢秋夫氏の『井関隆子日記』(全三巻、勉誠社、上巻は昭和五十三年・中巻は同五十五年・下巻は同五十六年)、『井関隆子の研究』(和泉書院、平成十六年)、『旗本夫人が見た江戸のたそがれ——井関隆子のエスプリ日記——』(文藝新書、平成十九年)による)。これらの著作は、いずれも井関隆子が晩年にまとめたものである点、本稿で対象とした充真院の著作、および代表作というべき著名な四冊の紀行文と共通している。当時の上流階級の中でも教養深い女性にとって、隠居として生活が保障された晩年期の過ごし方として、著作に勤しむことは、知的好奇心を充足させる楽しみであり、生きがいの一つであったといえよう。

(4) 翻刻本の九八頁。

(5) 右同書、七一頁。

(6) 右同書、七〇頁。

(7) 右同書、七二頁である。

(8) 前者は右同書、七一頁。後者は九五頁。

(9) 右同書、六四頁。

(10) 右同書、六六頁。

(11) 原本を見ると、丁の終わりに不自然すぎる大きな余白が見られる箇所が四つあり、さらに丁が改まった部分の前後の文が整合性のない場合が二つある。これらは、本来は別々に作成していた草稿を、後に一書にまとめたために生じたものである。

(12) 目次の項目数について少しふれておきたい。本書の原本を確認したところ、目次は四三項目であるが、翻刻本は四四項目であり一項目多い。その部分は翻刻本の目次(三三頁)の最後に示してある「五月雨人と冬至を知る法」である。翻刻作業、もしくは活字化作業の過程で誤って混入したのであろうか。

## 2 鳥の飼育法

本章では、鴛鴦・金鳩・丹頂・鶏について扱う。まず、鴛鴦の飼育から見てみよう。<sup>①</sup> 充真院は、鴛鴦の飼育法について、「少し計書置しゆへ、又よく知る人二たつねへし」と述べている。<sup>②</sup> 少しでも記すとか、詳しく知っている人に尋ねるようにと、謙虚な姿勢であるが、実際には、なかなか詳細に説明している。

充真院が鴛鴦を飼育したのは日向国延岡に居を移していた頃のことである。「西之丸辺の御屋敷ニては、庭に池ほり：」<sup>③</sup> という文章は、延岡城の西の丸の近隣に充真院の屋敷があったことと一致する。<sup>④</sup> 延岡城と充真院の屋敷は、五ヶ瀬川と大瀬川の間に位置しており、水鳥が身近に生息する環境である。そこで、屋敷の庭に池を掘って、飛来した鴛鴦を飼育したのである。延岡の屋敷地ならではの環境に即した飼育といえる。

延岡に充真院が居住していた時期は、文久三年（一八六三）六月から慶応元年（一八六五）三月、および同四年（一八六八）六月から明治五年一月（一八七二）である。<sup>⑤</sup> すなわち、充真院が六十四歳から六十六歳、および六十九歳から七十三歳の頃に相当する。この期間のうち、何年に鴛鴦を飼育していたのか、具体的な年を絞り込むことはできないものの、いずれにしても、晩年期の慰みとしての飼育であったことは間違いない。

鴛鴦の飼育についての記載は、庭に鴛鴦を呼び込み卵を産ませる方法からはじまり、孵化、および孵化した雛を親から離して手元で育てることについて、飼育方法や注意事項などである。挿絵が二つあり、一つは卵を産ませるための巣箱、もう一つはその巣箱を庭の池のところに設置した様子を描いている。

飼育は、成鳥の鴛鴦を庭の池に呼び寄せて、仕掛けておいた巣箱に卵を生ませることから始める。当時、二つの河川に挟まれた場所にある延岡城のお堀には、鴛鴦が生息していたので、それを屋敷に飛来させるように環境を整えるのである。そのためには庭に池を掘り、あらかじめ捕らえておいた鴨や家鴨などの水鳥を、風切羽を切り逃げないようにして、池に放しておく。<sup>⑥</sup> そうすると、「外より友居し俟、日々池に参り居、友ニゑなとたへる」<sup>⑦</sup>、すなわち、鴛鴦は水鳥が庭の池にいる様子を見て、仲間がいるので安心だと思ひ、池に飛来して一緒に餌を食べるようになる。そのうち、庭の高い木に巣箱があることに鴛鴦が気づき、これを木のうろと思ひ、ここに巣を作り卵を産む、という段取りである。池を掘ったり、水鳥を捕獲したりと、準備が大掛かりであり人手もかかる。まさしく大名家ならではの生き物飼育である。

鴛鴦が巣箱内につくる巣について、充真院はこまやかな描写と感想を示している。巣箱に藁を半分ぐらい入れておくと、藁を「こと如くきれいにをのやうにさき、其上え自分の羽根をぬき、わたの樣にして其中え玉子うむ、誠によき細工なり」とある。<sup>⑧</sup>

卵の孵化については、三十日目に孵化すること、一、二日は遅れることもあるので、そのつもりで待つこと、八十八夜前に生んだ卵はよく孵化するが、その後のものは孵化しない場合が多いことなどを説明している。

雛が成長し風切羽が丈夫になると、親鳥が雛をどこかに連れていってしまうことがあるので、時期を見計らって、雛をとりあげて、籠に入れて手で飼育するのがよいという。それよりもよい方法は、孵化する前に卵を巣から取り出し、巣鳥（卵をかえす役目の鳥）を取り寄せて、それに抱かせることである。

飼育上の注意点としては、逃がさないための方法を示している。鴛鴦は水鳥なので、外で遊ばせる時は逃げる可能性があり油断できないので、水溜を拵え、その上に網をかぶせて遊ばせれば安心であるという。さらに、雛鳥が成長してきて、羽が伸びてきたら、風切羽を切り、飛翔力を奪うことも肝要である。

一方、鴛鴦を奪われないように注意することも必要である。実際に、充真院は鴛鴦を何物かに捕られてしまった苦い体験がある。これについて、「私ハくるりへい有所ゆへ、氣つかいなしと、子共を付置し所、食事ニ参り候うちニ鳥とられ、羽一ツ見へす、由断のならぬもの也」、すなわち敷地の周りにくるり堀を廻らしてあるので、心配ないと思ひ、子供に見張りをさせて食事の為に席をはずしている間に、鴛鴦を捕られてしまい、羽の一つも残っていなかったというのである。<sup>8)</sup>

この犯人について、右の文中には具体的に記していないが、堀があれば本来ならば侵入を防げると思われる物ゆえ、猛禽類ではないことは明らかである。どうやら、この犯人は、いたちのようである。それは鴛鴦に関する文の末尾に、「地よりいたち杯いらぬようニ致度ば、地を一寸もほりて、夫えはまくり貝をたゝきこはしてしきりニすれば、地をくゝり、其所へハはいられぬとの事」と、私たちの侵入を防ぐ方法を示していることによる。「地をくゝり」とは、何らかの障害物があるので地面を掘り、その下をくぐって侵入するということである。実際に、いたちが堀の下を掘って侵入してきたことがあったからその記載であろう。

鴛鴦を飼育する充真院の温かな眼差しを感じる記述を、二つほど紹介しておこう。一つめは、「水鳥の事ゆへ、水ニ入ては又親鳥のせなかへのりしまゝ、せなか水たらけになれども、親庭鳥ハわか子と思悦居、しせうの事とおもふ、虫なそ取てよひてやる其心根、ふひんと存候」である。<sup>9)</sup> 鴛鴦の雛が、庭にいる水鳥（風切羽を切られた鴨や家鴨）の背中に乗っている様子、および水鳥が鴛鴦の雛に虫を捕って与えている様子を、充真院は目にしていたのである。本当の親子ではないのに、雛が水鳥を親のように慕ったり、水鳥も雛を自分の子供のように世話をやいている様子を、充真院は微笑ましくも、不憫さも噛み締めつつ眺めている様子が窺い知れる。

もう一つは、雛の巣箱にかけた足場を雛が登ってゆく様子について、「夫ふよちくゝと登り穴ニ入」と記している。<sup>10)</sup> 雛がおぼつか

ない足取りで巣箱に戻っていく姿が目には浮かぶようである。特に幼い生き物の姿は愛らしく、飼育する者の心を温かく満たすのは、昔も今も変わらない。充真院もそのような気持ちを感じていたのである。

鴛鴦の飼育は、充真院の御付の者も手伝っていた。「千よ」という者の名前が具体的に出てくる。「千よ」は鴛鴦の巣箱に、足場を設置するのを手伝っている。その他、前述したように子供に少しの間、見張りをさせることもあった。

しかしながら、鴛鴦の飼育は水溜の上にかけていた糸製の網が、ほどなく腐れて切れてしまい、金網でなければ危険と思われたので、それを契機に止めたという<sup>13</sup>。このことと、前述したように育てていた鴛鴦を捕られたことをあわせて考えると、鴛鴦を飼育した回数はいくつもなく二回であり、飼育としては成功したとはいえないようである。

次に金鳩についてふれておこう<sup>14</sup>。金鳩についての記述は、量的には少ないものの、手間をかけて丁寧に育てていた様子が窺われる。飼育の第一歩は、金鳩を庭に呼び寄せて巣を作らせることである。鳥籠を設置してその中に柵を設け、巣の材料になるものを入れておくと、金鳩がやってきて卵を産むので、その準備から始める。卵は二十日で孵化する。

金鳩の雛は、羽が生え揃うほどになった頃、二日続きで巣から落下して死んでしまった。このようなことが、何度も続いたので、充

真院は残念に思い、金鳩飼育の名人に教えを乞うことにした。名人によると、原因は餌が足りないためであるという。雛は餌を求めて、落ちてしまったというのである。そこで、名人に鳥籠ごと雛を預けることにした。名人は、粉米を少し冷やして手に握って、小指の間から細く出したものを雛の嘴に添えると、雛は親が餌を与えてくれていると思ひ、よく餌を食べた。このように大切に育てているうちに、雛は餌が欲しくなった折に人の足音が聞こえると、「ひよひよ」と鳴いて餌をねだるようになった<sup>15</sup>。実にかわいい盛りである。

雛は皆にすっかりなつた。その後、蛤の貝殻に卵の黄身をのせ与えるようにしたところ、雛は黄身を喜んで食べた。その様子について、「きみ入やると悦、ゑふくろよりきみすきみゆるを見、やめ申候」とある<sup>16</sup>。雛鳥特有の餌袋に、食べた黄身が透けて見えるので、黄身の溜まり具合をうかがいながら、餌を与える量を加減する。雛に餌を自らの手から与える喜びや、雛になつかれていとおしさを感ずるなど、ふれあいを満喫したのである。「三四寸程よりいづもく左様二致候へば、よくそたち申候」とあるように、大切に育てた雛は立派に成長した<sup>17</sup>。しかしながらその後、充真院は金鳩の飼育を止めてしまった。「度々世話故、末二ハ好候人二遣しやりぬ」とあるように、後には金鳩が好きな人に譲り、飼育に終止符を打った<sup>18</sup>。

丹頂については、「誠二めい鳥といへは、おもしろミ少シ」と充真院は感想を述べている<sup>19</sup>。その容姿の美しさを認めてはいるものの、



前述した鴛鴦や金鳩を愛玩の対象として慈しんでいた様子とは大違いである。「庭の泉水二網もかけず、昼夜共はなしかい」とあるように、丹頂は屋敷の庭に終日放し飼いにされていた。不審な物に気づくと、丹頂は警戒して平生とは異なる鳴き声を出すので、用心のためになり、しかもたちが侵入してくると、嘴で突つき殺してしまう。本来的には鑑賞用の鳥であるが、実に逞しい鳥であり、鴛鴦や金鳩のように雛から育てて慈しむ悦びを味わう鳥とは、異なるのである。幼鳥を飼育する方法に関する記載が全くないのは、内藤家の丹頂は成長したものを飼うようになったからなのではなからうか。

鳥類の最後として、鶏についてふれておこう。充真院が鶏を実際に飼った様子は窺えないが、飼育における知恵を書き留めている。充真院は鶏を、卵を生産するための鳥として認識している。したがって、食料の供給源としての効率を如何にあげるか、如何にして質の良い卵を産ませるかという点が関心事項である。「鶏に日々玉子うませんと思ふ二ハ、たへすむきみを日々に沢山やれば、きハめて生なり」とあるように、毎日卵を産ませようと思うならば、常に貝の剥き身を沢山与えること、そうすれば新鮮な卵を産むという<sup>21)</sup>。

さらに、鶏の蚤を駆除するには、猫の病気や蚤の駆除の薬として用いられる「うやく」すなわち鳥糞を煎じた湯に入れると良いと伝聞を書き留めている<sup>22)</sup>。

飼育者側に関することとしては、鶏の羽に羽虫がわき、それが人に伝染する時は、「羽おしろい」という物をよく擦り付けければ「其

かゆみとれる由」と伝聞として得た知識を記してある<sup>23)</sup>。

鶏に関する記載は、実際に身近にいた鴛鴦・金鳩・丹頂の記載と比較すると、淡々とした筆致であり、充真院の感情は全く窺えない。

(1) 鴛鴦に関する記載は、翻刻本の六二―四頁。

(2) 右同書、六四頁。

(3) 右同書、六二頁。延岡での充真院の居所は、本丸外の北側と五ヶ瀬川の間である。この屋敷地は、現在の本小路に位置する（現在地については、内藤記念館学芸員の増田蒙氏に御教示をいただいた）。『色々見聞したる事を笑ひに書』の「牛天神の社内から見おろしたる気色…」（八三頁）の挿絵に、西の丸のすぐ近くに「充真院住居」を描いている。

(4) 充真院が延岡に居住していた時期については、明治大学博物館編『内藤家文書増補・追加目録8 延岡藩主夫人 内藤充真院繁子道中日記』（平成十六年）の二二六―八頁や、『内藤家文書増補・追加目録9 延岡藩主夫人 内藤充真院繁子著作集1』の一八五―六頁に記してある四回の旅の時期に関する説明を参考にした。

(5) 延岡城のお堀に鴛鴦が生息していたことや、鴛鴦を呼び寄せるために庭の池に放した水鳥は鴨と家鴨であることについては、充真院が作成した無題の史料である「源氏目録の長歌他」(『内藤家文書増補・追加目録(5)』の(3)充真院(繁子)関係(II)の史料番号四四)の記述による。当該部分は「西丸辺ニては、御堀ニ居候をし鳥、庭に池ほり置、かも・あひるの類はなち置候へは、ともにつれ、て折々参り候」とある。この史料には、『色々見聞したる事を笑ひに書』と共通する内容として、鴛鴦の飼育法と「甲州なまり歌僊」が収録してある。

(6) (7) 翻刻本、六二頁。

(8) 右同書、六三頁。

(9) 右同書、六四頁。

- (10) 右同書、六三頁。  
 (11) (12) (13) 右同書、六四頁。  
 (14) 金鳩については右同書、六四〇五頁。  
 (15) (16) 右同書、六四頁。  
 (17) (18) 右同書、六五頁。  
 (19) 丹頂については右同書、九〇頁。後述した丹頂についての引用も当該頁である。  
 (20) 鶏については右同書、六五頁、七一頁、九六頁、一〇〇頁。但し、いずれの記事も極めて短文である。  
 (21) 右同書、六五頁。  
 (22) 右同書、一〇〇頁。  
 (23) 右同書、七一頁。同様の記載が九六頁にもある。

### 3 昆虫の飼育法

昆虫の飼育法として、山繭蛾・蚕・鈴虫について見てみたい。まず、山繭蛾からふれておこう。<sup>(1)</sup> 充真院は「山舞蝶」と記しているが、当該記事に張り込んだ絵から判断すると、「山繭蛾」のことである。<sup>(2)</sup> 実際の分類としては蛾なのだが、充真院は蝶と認識していた。山繭蛾は「山蚕蛾」とも表記し、繭からてぐすが取れるので、本来は蚕と同様に収穫を得るといふ目的を伴う飼育である。冒頭の部分に、「山舞もかいしミれとも、なれぬ事故かおもしろみも薄シ」と、飼育したものの面白みをあまり感じられなかったと記述しているの<sup>(3)</sup>、充真院にとってはよほど甲斐のない飼育だったのである。

山繭蛾の飼育は、「外よりか<sup>(3)</sup>いりしをもらい」とあるように、成虫を譲りうけて開始した。<sup>(4)</sup> 飼育した当初は、庭の植木を山繭蛾の住処としたが、雀に取られて数が段々減ったというので、何匹も飼育していたようである。その後、軒下から四方に網を張り、網の下に台を設置してその上に花を植えて水を湛えた鉢を置いてみたりしたが、後には、軒から網をはるのではなく、支柱を四本立てたところに網をかけ、その下に植木の鉢を設置するような簡素なものに変更している。簡素な飼育設備については、充真院が描いた挿絵が添えてある。右の記述により、飼育する場所や設備を三回変更したことが確認できる。

網を張った中で飼育したものの、逃げ出す山繭蛾もいた。そのことに対して、「山舞はきやう義悪くて外二にくる事も有ゆへ、網ハいろくの用心」をしていたという。<sup>(5)</sup> 行儀が悪いという擬人化した表現から、充真院のユーモアのセンスが伝わってくる。同時に、充真院が山舞蛾の脱走を防ぐために、あれこれと工夫をこらしていた様子もうかがわれる。

充真院が飼育した山繭蛾は、その後、卵を産み、孵化することとなるが、「私ハ委敷世話も致不申候ま、書留る程ニハ申されず」とあるように、<sup>(6)</sup> 二代目になる山舞蛾の世話や観察についての記述はない。もらってきた一代目の山繭蛾のみで、充真院の興味は薄れてしまったようである。繭からてぐすをとるといふ、最終目的も果たさなかったのであろう。

とはいえ、飼育していた山繭蛾は、餌として与えた椶と柗の葉のうち、椶の葉の方を好んで食べていた旨の指摘がある。飼育していた限りにおいては、餌の嗜好に關しても觀察を行なっていた。

山繭蛾については、成虫と脱皮後の繭の様子を描いた絵を誰かから貰い、前述したように当該部分に貼っている。この絵は、本物と見まがうような、極めて写實的な筆致である。

次に蚕の飼育についてみてみよう。蚕についての記述は、本書では二箇所に収載してある。様々な事項のなかでも特に紙数を費やしているが、清書に加えて草稿も収載されている。<sup>7</sup>記載自体が詳しく長文になっている点は、充真院が蚕の飼育について深く関心を寄せていたことの反映といえよう。

蚕の飼育は何度も試みたようである。具体的に何回飼育したのかということも明記してはいないものの、少なくとも三回以上は育てている。それは、「お光死たる秋」「又一とし古川ニて子共悪く成し時」にも蚕を飼育しており、その時には飼育に失敗したという。<sup>8</sup>二回失敗しているものそれらは例外であり、全体の記述からは成功している様子がうかがわれるので、飼育した全ての回数こそ確定できないものの、少なくとも三回以上であることは間違いない。

なお、右に示した「お光」とは、孫娘の光姫のことである。光姫は慶應三年（一八六七）八月に病死したので、この年に蚕を充真院が飼育していたことは確実である。したがって、充真院が蚕を飼育していたのは、この前後、すなわち幕末であったといえよう。

蚕の飼育は、江戸と延岡との両方で行ったようである。江戸で飼育していたことの根拠は、右に示した光姫が死去した年に蚕を飼っていたことによる。光姫が亡くなった慶應三年八月には、充真院は江戸の六本木屋敷に住んでいた。幕府が参勤交代制の復旧を図ったため、慶應元年（一八六五）年五月に江戸に戻っていたのである。<sup>10</sup>したがって、江戸で蚕を飼っていたことがわかる。

延岡で蚕を飼育していたことについても根拠がある。それは、蚕の側で不快な話をした折には蚕がうまく育たなかったため、そのよくな時には誰かに蚕を一旦託した後に取り返して育てるとよいと「延岡ニて委敷承り候」と記してあることによる。<sup>11</sup>

さらに、延岡で蚕を飼育したことをうかがえる様子をもう一例あげておきたい。桑を食べるようになった蚕を入れる箱に関する説明の部分に、「延岡ニていふもろふた」を用いたとあることによる。延岡で「もろふた」と呼んでいるものは、「ひろふた」のことであり、充真院はその箱の絵を描いて説明している。<sup>12</sup>

充真院は、自らの蚕の飼育について「私共慰ニかうニハ…」と述べているように、あくまでも慰めとして飼育しているものの、「蚕所ニてハ…」というように、本格的な飼育法についても知識として吸収したうえで、自らの飼育の工夫を試みている。<sup>13</sup>はじめから必要最低限の知識のみにとどまらず、まずは広い知識を得ようとしている点は、知識欲の旺盛な充真院の人柄がしのばれよう。

蚕については、その入手方法から書き始めている。既に卵から孵っ

たものを知り合いからもらう場合、または種紙を購入する場合の二通りがある。もっとも、種紙の販売は所にもよるが、少量は販売しないということも添えている。

卵については、孵化する直前の卵が紫ばむことや、孵化しそうなったら自分の背中に入れて、体の温かみを加えれば一度にかえること、しかしながら、桑の葉の芽が出てくる時期でないと餌に困るので、その場合は温めずにそのまましておくほうがよいという。孵化の折、先に孵った若干の個体については、他のものと大きさに差ができてしまうので、一日ぐらいはそのままにしておき、桑を餌として与えない。そして多くの卵がかえった時に、掃きたてをして種紙から幼虫を離して、桑の葉を細かくきざんだ中に入れて育てると、個体の大きさの差異がなく育つという。

餌の与え方については、孵化したばかりの頃は、桑の葉の露を吸う程度であることや、できるだけ少しずつ桑を与え、葉が乾燥しないようにするのがよいと、自らの感想も含めて述べている。その理由として、干からびた葉が積もると、蚕はその下におり育ちが悪いという。一方、新鮮な葉ばかりであると、その上に幼虫が登って育つという。つまり、新鮮な葉はよく食べるが、乾燥した葉は食べようとしていないのである。

そこで、乾燥した葉は取り出すようにしたが、乾燥した葉が多く出てしまうので、充真院は小さい入れ物に桑を入れてそこで幼虫を育てるといのように、工夫をしている。慰みとして飼育するのであ

るから「すてるハおしく思」と感じ、無駄を出さないようにしたのである。<sup>14</sup>一般に比べると豊かな大名家による飼育であっても、節約すべき点は無駄を出さぬようにわかまえていた様子<sup>15</sup>がうかがわれる。

餌の無駄を出さぬ工夫に加えて、育ちの悪い小さな幼虫が、積もった桑の葉に隠れて付着していたのを、掃除の折に気づかず<sup>16</sup>に誤って捨ててしまうことを防ぐための工夫も、充真院は試みている。幼虫に餌を与える場合は、桑の葉を「細くきざみ其中へ入れば」<sup>15</sup>「こまかく切ふりかけ遣ス」というように、桑の葉を刻んで与えるのが一般的な方法であるが、充真院は葉を刻むことはせずに、「葉のまゝを、ちいさくぼち／＼とあなあけ遣しければ」と、葉の表面に小さい穴をぼつぼつと開けて、幼虫の箱に入れてみた。<sup>16</sup>そうしたところ、幼虫は葉を両面から食べるので、掃除の時は葉を裏返して見れば、幼虫が捨てようとしている葉に付着していないかどうかを簡単に確かめられると言っているのである。この方法は、充真院が「桑え虫付候を知らずすて候事有ゆへ」と記しているように、<sup>17</sup>実際に何度か幼虫を誤って捨ててしまったことを惜しく思い考案したものであった。実際の体験から、新たに導きだした方法なのである。

もっとも、充真院はこれ以外の方法も試みていた。それは「私ハ葉ヲやふりちいさくして遣ス」<sup>18</sup>である。葉を細かに刻むのではなく、小さく破いて与えることも試してみた。この方法については、草稿では葉に穴を開ける方法と共に記載していたが、清書では葉に穴をあける方法のみを示し、小さく破く方法は記していない。清書では、

最も効果的で推奨すべき方法のみを紹介したのである。充真院はあれこれと工夫をこらして蚕を飼育していたのである。なお、餌は幼虫が大きくなったら、桑の葉に穴をあけるのをやめてそのまま与え、さらにより成長したら桑の枝を折り、飼育箱に枝ごと入れて与えた。慰みとしての飼育ではあったが、幼虫が成長するにつれて、飼育箱を大きくしたり、増やしたりしているうちに、「末二ハ蚕の棚つり、幾段もくならへ置」とあるように、吊り棚を作り何段も並べる程、大がかりな規模となっている<sup>19)</sup>。

蚕を飼う折に、育てる側の注意事項を二点指摘している。一つは、蚕は不吉なことや人が死ぬ話を嫌うということ、もう一つは月の障りがある時は蚕に触れてはいけないということである。現代人からみれば、迷信とみなされてしまいがちだが、当時の人々にとっては気になる事項である。しかも、不吉なことや人が死ぬ話を嫌う旨については、光姫が病にふせていた折に、飼育していた蚕が段々と弱り沢山死んでしまったという事実がある。この件について充真院は、「是ハ五月の事、お光死たる秋二候へ共、しるゝと見へ候」と見解を述べている<sup>20)</sup>。さらに、その一年後に、古川で子供が死亡する事件があり、場所も離れているので、つい蚕の居る場所での話をしたら「此時も皆たねなしに落シ」たという<sup>21)</sup>。偶然の一致にすぎないのだが、度重なったことでもあり、充真院としては不吉なことと蚕の成長の因果関係を信じたのであろう。

月の障りに関しては、「月のさハりの節ハあやかり候故、さハら

ぬ方よしとおしへられしかと、人手すくなき折ハかまハす世話致、跡ニて切火打掛候」とあるように、当該期間中の人は蚕に触らない方がよいと教えられたものの、世話をする人手が足りない時にはかまわず世話をしていた<sup>22)</sup>。もっとも、世話をした後には火打ち石を打ち合わせて切火をして清めをしている。穢れの発生については、臨機応変に対処していたのである。なお、女性特有の状況に対する記事が存することから、蚕の飼育は充真院の身近に仕えていた女性たちが手伝っていたことが窺われる。

ところで、充真院の蚕飼育の腕前は実際にどのように評価できるであろうか。前述したように、工夫をしている点から積極的な姿勢が明らかである。飼育の回数も度々であり、経験知を得ていることも確かである。慰みとしての飼育とはいえ、上手だったのである。それは三度子、すなわち夏子といわれる時期の蚕を人からもらい、上手に育てたことによる。蚕は八十八夜のころに孵化するのが初子であり、それよりも遅い時期に孵化したものは、大きく育てるのが難しい。しかしながら、充真院は「三度子乍、初におとらすよく出来、人々夏子ニは珍ら敷程上出来とほめられ候、糸もよく悦候」と、上手に育てあげて周りの人々から褒められたことや、繭もりっぱに育ち糸もよく収穫できてうれしく思ったことを素直にしたためていた<sup>23)</sup>。この記載から、充真院が蚕の飼育を楽しみ、喜びを感じていたこともうかがわれるのである。蚕の飼育については、蚕に関する詳細な観察も記載してあるが、この点については別の機会に譲りたい。

昆虫の最後として、鈴虫についてふれておこう。当該記事は、清書と草稿が共に収載されている。<sup>24</sup> 両者を比較すると、草稿の記載の方が詳しく、かつ正確である。例えば、清書には購入した鈴虫を雌雄を分けて、雌のみ壺で育てて卵を産ませるとあるが、雄雌共に飼育してこそ卵を産むのが現実である。そこで、鈴虫については草稿を基本としつつ、清書の記載のうち事実が確実な部分を補ないながら見ていこう。

前述したように、充真院は鈴虫を自らの意志で飼育したことはなく、幼い頃に他の人が飼育しているのを見たり、少しだけ手伝ったことがあるにすぎなかった。とはいえ、「金魚杯とちかひ、よほど世話も沢山故むつかしく」と、鈴虫は金魚よりも飼育がむずかしいと認識していた。<sup>25</sup> 自らが全面的に世話をしたのではないため、詳しくは知らないというが、門前の小僧の如く得た飼育法を書き留めている。

鈴虫を飼育することを思いついたら、晩秋に虫屋から成虫を購入する。その際、雌は三、四匹購入する。雌は尻の部分にけんが三本あり真ん中が長く、雄は長い髭があるというように、雌雄を識別する特徴についても記している。

当初は、赤土と少々の石を入れた壺で鈴虫を育てる。鈴虫はたくさん壺にいて飼育すると共食いをするので、一つの壺にたくさん入れてはいけない。やがて、雌は土の中に卵を産みつける。餌は、茄子を二、三分の厚さの輪切りにして、その面に格子状に薄く切り

込みを付け、一度水に浸してあくを抜いてから、壺の中の平石の上に乗せる。平石の上に餌を置くのは、腐敗を防ぐためである。雄と雌が死んだら、それ以後は卵を産みつけた壺の土があまり乾かないように水を吹きかけつつ管理する。置き場所は、障子越しに日があるところがいい。壺には、厚紙で作った蓋をつけるが、真ん中には穴を開けて空気が通るようにする。冬季は卵として過ごすので、その間は世話をする必要はなく、あまり動かさないように片隅に置いておく。

春になり暖かくなると幼虫が孵化する。逃げないように気をつけ、霧を吹き湿気を与えて野原のような環境を心がける。幼虫がかえったばかりの頃は、まだ茄子や胡瓜が実る季節ではないので、かつおぶしを水にひたしたものを与える。この頃に、幼虫に少し砂糖水を吹きかけてやるとよいと言う人もいる。

そのうち、脱皮して鳴き初めたら、鈴虫駕籠に移して音色を鑑賞する。鈴虫は動きが敏速なので、蓋を開ける時は飛び出さないよう注意すべきである。鈴虫はよく世話をすれば沢山孵化する。たくさん孵化した場合は、鈴虫籠では小さすぎるので、大きな四角い籠を作り、そこで飼育する。以上のように、充真院が子供の頃に見て知った飼育法は、現在の鈴虫飼育にも、そのまま応用できそうである。

飼育法を書き留めたものの、そもそも充真院は鈴虫をあまり好んでいなかった。鈴虫を自らの意志で飼育していないことから、鈴虫に好意的ではないことが察せられるが、それに加えて「耳やかまし

き程りんくくとなくハ覚居」「虫多く入候も、夜分ハリんくくと大そふなき出ス、少シ音留り候と思ハ、めむしと共二壺二入ル」と記している点に注目したい。<sup>(26)</sup>

本来は鈴虫を飼育する場合、その音色を楽しむものであるが、充真院は鈴虫の鳴き声をやかましいと感じていたのである。それ故、沢山鳴いている場合は、雌雄を一緒の壺に入れば鳴き声が少し止むというように、静かにさせる方法に関心が向いていたのである。充真院が鈴虫を好まない原因とは、その鳴き声にあったのである。

- (1) 山繭蛾については、翻刻本の六五～六頁。
- (2) (3) (4) 右同書、六五頁。
- (5) (6) 右同書、六六頁。
- (7) 蚕については右同書、七六頁～八三頁と、九六頁に収載してある。そのうち、前者は清書と草稿が前後して綴っており、後者は草稿である。
- (8) 右同書、八〇頁。
- (9) 明治大学博物館所蔵内藤家文書、「御姫様御病氣御差重被遊候付同御機嫌之御帳」(第一部・四家・五〇七)、「光姫様御遠行一件」(第一部・四家・五〇八)による。光姫は文久元年(一八六一)に延岡から出てきて江戸屋敷に住み、充真院から行儀作法を躰けられていた孫娘である。文久三年四月に充真院が延岡に居を移す旅にも同行していたことが、『内藤家文書増補・追加目録』延岡藩主夫人 内藤充真院 繁子道中日記の七頁や九頁から確認できる。
- (10) 右同書の二六七～八頁。翻刻本の一八五頁。幕末・明治初期にかけての充真院の居住地の移動については、充真院の四点の紀行文、およびそれらについての解題から窺い知ることができる。

- (11) 翻刻本の七八頁。
- (12) 右同書、七七頁。充真院が絵に添えた説明によると、「もろふた」とは、「長サ三尺計、はしハ一尺五寸計」、すなわちおよそ縦が一メートル、横が四十八センチの箱である。箱の厚みについての具体的な数値は記載していないが、平らな箱である。
- (13) (14) 右同書、七七頁。
- (15) 二つの引用のうち、前者は右同書の八〇頁、後者は九六頁。
- (16) 右同書、七七頁。桑の葉に穴を開けた様子を本文の行中に挿絵で示している。当該部分は七八頁と九六頁である。そのうち、九六頁は草稿であるが、こちらの方が上手に描いている。
- (17) (18) 右同書、九六頁。
- (19) 右同書、七七頁。
- (20) (21) (22) (23) 右同書、七八頁。
- (24) 鈴虫については、右同書の七〇～一頁に清書、九四～五頁に草稿が収載されている。
- (25) 右同書、九五頁。
- (26) 前者の引用は右同書の七一頁、後者は九五頁。

#### 4 その他の飼育法

その他として、金魚・河鹿・猫について見てみよう。まず金魚の飼育法である<sup>(1)</sup>。金魚は敷地内の池で卵を産ませ、その卵を採集して手元で育てる。金魚に卵を産ませるために、春から餌として赤ぼうふらを沢山与える。金魚は卵を生む前夜に生臭くなり、「ぼちや〜」と音をたてたという<sup>(2)</sup>。その翌日の朝、五つ前(現在の午前

八時前)に、池の外に設置している水船に、親の金魚が卵を産みつけた藻を取りあげる。早く池から取り上げるほど、よい金魚が育つという。卵のついた藻を入れた水船は、日陰に置いておく。金魚が卵を産む時期は三回あり、三月はじめのものを一番子、四月ごろのものを二番子、その後のものを三番子という。孵化する時期が遅いほど、成長が遅く小さい金魚になる。

卵は二、三日で孵化する。孵化したばかりの稚魚には、餌として鶏卵の黄身を麻の布に包み、絞って漉しだしたものを与える。黄身を食べた稚魚の腹は、黄身が透けて見える様子を、充真院は観察している。水がにごらないように水質の管理に気をつかうことも必要である。稚魚が少し大きくなったら、餌としてみじんこを与える。その際には、小さい皿か平茶碗のようなものにみじんこを沢山いれて、そこに五分ばかりの金魚をいれてみじんこを食べさせる。みじんこをたくさん食べた金魚は、頬を膨らませ、満腹になるとみじんこを吐き出すので、その様子を確認しながら、金魚を入れ替えながら、餌を食べさせた。実に手間をかけて餌を与えたのである。

金魚を育てる入れ物は、大きいほど金魚が早く大きく育つ。卵から飼育しているので、稚魚がたくさんいたのであるが、多すぎると育ちに不都合があるので問題である。その対策として充真院は次のように述べている。「ふさやうしのやう成かたち悪くと思ふ金魚ハ、一寸計二なれハ、早く人二遣し候て、内ニハよきの計少しにすると早く大きく成<sup>3</sup>」。形のよい金魚は手元に留め置いて育て、形の悪いも

のは、人に譲ってしまおうというのである。生き物であるから、増えすぎたものは誰かに育ててもらおうのが良策ではあるが、良いものだけを自分で飼育しようというところに、充真院のお姫様育ちならではの性格を感じるが、いかがであろうか。

とはいえ、充真院は金魚を卵から沢山かえして、稚魚を大切に育てることに成功していたのである。多すぎる金魚の貰い手に困った場合は、金魚屋に引き取って貰うという方法もあることを充真院は知っている。この件については「こまり候ハ、金魚やてももらうとの事<sup>4</sup>」、すなわち金魚屋が引きとるといふ情報を記すに留まってお<sup>5</sup>り、実際に自分が育てた金魚を引き取って貰うには至らなかった様子である。

金魚を飼育する楽しさを、充真院は存分に味わったようである。稚魚は餌の玉子の黄身を与えてくれる人を知っているという。「魚少しそたちたるハ、玉子を知りて遣ス所二人の足音を聞とよりくる」と、餌をくれる人に懐く様子をしたためている<sup>5</sup>。飼育者冥利につきる金魚の反応を、充真院はさぞいとおしく感じたことであろう。

金魚の飼育においても、充真院ならではの方法を試みている。それは水替えの方法である。新しく水を入れる時には、水が動かないようにして、金魚が流れていってしまわないように注意すべきである。そこで、水船の下方の排水口の上に植木鉢を置き、そこに石を入れて、水が少しずつ排水されるようにした。常に工夫をこらしてみる充真院らしさが表れた一場面である。



なお、金魚の飼育法と併せて、めだかについても若干ではあるがふれている。めだかは、いつ卵をうみつけるのが判断しにくいという。卵を孕んでいるめだかを見つけたら、別の容器に取り出して、藻を沢山いれてやると、いつの間にか卵を産みつけているという。また、何日ぐらいで孵化するのもわからないう。めだかの稚魚が孵化したら、水をかえることはできないともいう。小さい稚魚なので、排水と一緒に流してしまう危険があるからである。めだかの稚魚の餌は、麦こがしを煎餅のように平たくしたものを与えてもよいという。冬季は大きな瓶を地面に掘り込み、蓋をして温かくしたり、日差しのある時は薦を取り除け日光にあててやるとよいなどと記している。

右のように、めだかについては飼育上の知識・心得を記録したものの、孵化の日数が不明であったり、体験に基づく記載や感想がないので、充真院はめだかを実際に飼育していないのであろう。

次に河鹿についてである。まず、河鹿は蛙の一種であることや、体の特徴として手足の先が平たい玉（吸盤のこと）のような形態であることを説明している。続いて「まづは宇津のやとつけ多との事、私とをりし時ハ、谷河の流ニてよくなきしを聞、売居しま、少々整参ル」とある。すなわち、河鹿は宇津ノ谷峠に沢山生息しており、充真院は宇津ノ谷峠を通行中に、その鳴き声を聞き、当地で販売していた河鹿を何匹か購入したのである。

実は河鹿を入手したのは、充真院にとって三度目の大旅行の途中

である。その旅は、慶応四年閏四月に再度、江戸屋敷から領国の延岡に赴いたもので、旅の九日目である閏四月二十八日に通りかかった駿河国有渡郡に位置する東海道の宇津ノ谷峠でのことである。

充真院がこの旅について記した旅日記「三下りうかぬ不調子」によると、宇津ノ谷峠を通行した二十八日は雨が降っていたという。それ故、河鹿が沢山鳴き、美しい音色を聞かせてくれたのである。充真院は河鹿の声にたいへん心打たれたようで、旅日記に左記の和歌を書き付けている。

宇津の谷峠にてかしかの声きゝて

山川のみなきり落る五月雨にかしかの声もふり出てなく

当該部分に河鹿を購入した様子は記載されていないものの、状況から察してこの折に購入したことは間違いない。飼育の対象を入手した時期や場所が特定できること自体、極めて稀である。それに加えて、当時充真院は六十九歳であり、飼育に取り組んだ年齢までも明確にわかる貴重な事例である。

旅の途中で購入した河鹿は、「入物ハ大坂え行て聞しかハ、かしか籠有との事、取寄見れば」と、大坂に到着した折に「かしか籠」という物があることを知り、さっそく取り寄せてこの中で飼育することにした。「かしか籠」とは、下部が平たい鉢で、上部に筒状の金網をかぶせたものである。充真院は「かしか籠」の挿絵を添えている。鉢の部分に小石を入れて、水をひたひたに入れ、河鹿を水辺の環境に近い状態で生活させる構造である。飼育については、「朝

夕清水を半時計はりてこぼす計也、蚤二ハはいを取てはなしやれハ、直二飛上りくう也」と、一日に二回、半時（現在の一時間）程、清水を鉢に満たすことや、餌は生きた蠅を与えることを記載している。餌については「沢山ニやれハよろしく候へとも、中々はい取る事むつかしく、一疋二七つくらいあてハ、網の中へはなし置」と、河鹿に餌を沢山与えたいが、蠅を捕らえること自体が難しいため、河鹿一匹につき蠅を七匹ぐらいの割合で籠の中に放して与えた。

充真院は河鹿の美しい鳴き声が気に入り、「こゑ涼しくてよろしく」と感想を述べている。前述した鈴虫の鳴き声をやかましいと感じた様子とは、対極というべき感想である。

河鹿は充真院一行と共に延岡に到着し、その後も大切に飼育された。充真院は「冬分ニなれハよハ」となるゆへ、はちのわきえをくよし」「寒ニなれハ日ふさぎ、ちゝみ居候」と、冬季に河鹿の体が弱っている様子を観察しており、それ故、火鉢の側に置き暖かい環境を保ち、越冬にこぎつけたのである。

なお、河鹿の入手先については伝聞として、東京ならば虫屋、延岡には具体的にどこかは知らないが一箇所あるらしいと、記している。充真院にとって、河鹿は飼育対象としてお奨めの生き物だったのであろう。

本章の最後として、詳細な飼育法こそ記載していないものの、充真院が飼育した生き物として猫についてふれておきたい。猫については、「猫手足のひらに、黒クふちの出来有ハ、外出すきとの事、

此度かへる猫、手あしのみめニふち有、大方夜分ハ外にかへらす」とあり、手足のひらに黒いふちがある猫は外出好きであると当時言われていたこと、および充真院が当時飼っていた猫はまさにそれに該当していたこと、そしてその猫は夜分になると大抵外に出かけていたという<sup>10)</sup>。「此度」とは、まさに充真院が『色々見聞したる事を笑ひに書』を作成している当時であり、その時に確かに猫を飼っていたのである。猫に関するいわれが、充真院の飼ひ猫にも該当しており、同感しながら記したのであろう。

猫に関するその他の記載としては、「ちん・猫杯のミ多付たるハ、せんふりをせんし出し湯ニいれ、ハ落ると吉」と、狎や猫に蚤がたかった場合には、せんぶりを煮出したお湯に入れるとよいと、駆除方法を示している<sup>11)</sup>。さらに、猫の病氣や傷に効く薬、および蚤の駆除については、「猫の病ニはうやくと云う薬を用ゆれハ宜しく、きす杯ハ出来し時、度々むしてやれハ肉杯上り、元之通りニ上ると云、せんしのましても吉、のミ杯も付たる時は、度々湯ニ入候へは去よし」と書き留めている<sup>12)</sup>。

実際に飼育していたにもかかわらず、猫についての記載は極めて少ない。その理由は、猫は当時の愛玩動物の代表であるため飼育法も広く知られており、とりたてて書き留めておくような珍しさがなかったからであろう。前述して紹介してきた『色々見聞したる事を笑ひに書』に記録された様々な生き物、およびその飼育方法のなかには、飼育すること自体が稀な種類であり、したがって充真院にとっ

でも貴重な経験だった場合や、あるいは充真院ならではの新案と言  
うべき飼育方法の工夫を考案したので、特記して伝えたく思ったの  
である。

なお、当時、猫と双壁をなす飼育動物として犬があげられるが、  
『色々見聞したる事を笑ひに書』には犬を飼育したという記載はな  
い。充真院はいうなれば猫派であったのだろうか。

- (1) 金魚の飼育については、翻刻本の六八～七〇頁。
- (2) 右同書、六八頁。
- (3) 右同書、六九頁。
- (4) 右同書、七〇頁。
- (5) 右同書、六九頁。
- (6) めだかについては右同書、六九頁。
- (7) 河鹿については、右同書、七〇頁。河鹿に関する引用も特記なき場  
合は、全て当該頁である。
- (8) 充真院が宇津ノ谷峠を訪れた件については、『内藤家文書増補・追  
加目録8 延岡藩主夫人 内藤充真院繁子道中日記』に収載されてい  
る。「三下りうかぬ不調子」の一九七頁。なお、充真院は初めての大陸  
行である文久三年にも、東海道を西に進む途中の四月十三日に宇津ノ  
谷峠を通過した。その折は、宇津ノ谷峠の険しさを旅日記「五十三次  
ねむりの合の手」に記した(二三頁)ものの、河鹿についての記録は  
ない。
- (9) 猫については右同書の七一頁・九六頁・九七頁・一〇〇頁に記載が  
ある。いずれも短文である。
- (10) 右同書、七一頁。九七頁は草稿で同文である。
- (11) 仲や猫の蚤を駆除する方法については、右同書の七一頁と九六頁に

同文の記載がある。前者が清書で後者が草稿である。なお、冒頭の日  
次では、この前者について「猫の事」と題している。

(12) 右同書、一〇〇頁。

(以下、「5」以降は次号に続く)